

映画

僕は映画が好きだ。特に一人で劇場へ行き、何も買わずにただ観るのが好きだ。たまに友人と行きもするが、隣で話しかけてくる度に一人で行かなかったことを後悔する。そんな孤高の映画好きである僕が母と一緒に観に行ったのは、実に五年ぶり、小学校以来のことだった。

母も映画が好きだ。独身だった時はよく一人で観に行っていたらしいが、結婚してからはあまり行っていないそうだ。多分、合理主義で映画を時間のムダだと思っている父の影響だろう。そんな母を何を思ってか、僕はある日映画にさそった。

「どうしてさそったのか。」前日の夜にふと考えてみた。僕ももう高校生だ。一般的に男子高校生がお母さんと映画を観に行くというのが、ゼロではないにしろありえないことだという認識はあった。それでも母をさそった。どうしてか。その答えが出たのは、映画を観た後だった。

映画鑑賞後、入場時と同様に「周りのみんなは、この年で母親と映画を観にくるなんて、信じられないと思っているよな」という自意識に包まれながら映画館を出て、車の助手席に座った。結局答えは出なかったなと思った。疲れて座席のシートを後ろへ倒して寝ようとした時、母から「またさそってね」と微笑みまじりに言われた。

これが答えだと感じた。この日のことを忘れないと思ったから。周りにどう思われるかなんて関係なしに、高校生になって照れくさくてできなかった、「母を笑顔にする」という重大な任務を、やっとできたと思ったから。

「もうコリゴリだよ。」喜びや恥じらいを抑えながら喋るには、それが精一杯だった。

